

Editor's Note

ようやく山上研「研究室年報」の創刊第1巻が刊行のはこびとなりました。

講評

創刊第1巻の研究室年報では、2010年度分の卒業論文を収録することを第1の目的としました。今年度の卒論生は9名いたのですが、残念ながら提出できたのは7名のみでした。今年は就職状況が「超氷河期」といわれるほど悪く、そのために4年生の諸君は長くつらい就職活動を与儀なくされました。卒業研究の実験計画を固めるための「研究法II」の授業への出席もままならず、実験がスタートしたタイミングは僕がかつて経験したことのないほど遅い時期となりました。

掲載された卒業研究論文を読んでいただければわかると思いますが、着想と問題意識、オリジナリティと将来性において目を見張るべき内容を含んだ研究が多々あり、内容的にも他の研究者の参考になるような点がたくさん含まれています。しかし残念ながら、もっぱら時間不足ゆえの未成熟なところも少なからず残っています。メインの実験として書かれている研究が、本来ならば予備実験として行われ、その後に本当のメインの実験がなされたならば、すばらしい成果を得ただろうと思われる研究もあります。

例年、できるだけ多数の卒論を日本心理学会などの公けの学会で発表させるというのが山上研の教育ポリシーですが、今年は1、2本でしょうか。素材としてはそれぞれ良いものをもちながら、学生本人には責任のない社会経済的な状況のために十分な勉強時間の確保ができなかった皆さんの口惜しさを思うと胸がつまります。

なお博士課程院生の榎本さんには、知覚の身体化をめぐる問題について、最新のデータを織り交ぜて書いていただきました。まさに創刊第1巻の巻頭を飾るにふさわしい論文だと思います。

Science is like a box of chocolate.

しかし、2011年春に卒業していく皆さんにとっても、数年後、数十年後(?)に、これを書棚に見つけて、紐解き読んでみると、学生時代の楽しかったこと、辛かったことなどを懐かしく思い出せるよい記念になるのではないかと思います。サイエンスは人生のどの段階からでもやり直せますし、社会生活の中でサイエンスが活きる場面はいろいろあります。僕の研究室に配属になってから、2年間または3年間、いろいろと辛い面もあったかと思いますが、卒論をまとめるプロセスの中で、「世界中の誰も知らない新しい事実を知ること」の楽しさも体験したと思います。卒論締め切りが迫ってくる中で一心不乱に実験に取り組んでいる最中のあの楽しさを思い出しながら、みなさんが、サイエンスの真の楽しさを覚知した人間として社会の中で活躍してくれること、あるいは何らかの形でまたサイエンスの世界に戻ってきてくれることを心から期待しています。

(2011年2月7日 山上 精次)